



「濠亜（亜濠）地中海」とその現代的意味

庄司 潤一郎 研究幹事
 第 115 号 2020 年 5 月 12 日

NIDS コメンタリー

はじめに

1930 年代後半から大東亜戦争にかけて、日本の南進にともない、「濠亜（亜濠）地中海」（Australasiatic Mediterranean）という地域概念が、日本において散見されるようになる。その対象とする範囲は、アジア大陸（東南アジア）とオーストラリアの間で、太平洋とインド洋の結節点に当たる地域である。

戦後、これまで「濠亜地中海」については、ほとんど注目されてこなかった。波多野澄雄、後藤乾一、ヘンリー・フライなど¹が、言及している程度である。しかし、波多野は東亜新秩序をめぐる 1930 年代の日本の地政学、後藤は戦間期におけるポルトガル領チモールをめぐる日本と関係国との国際関係、フライは 16 世紀から第二次世界大戦にいたる日本の南進とオーストラリアに及ぼした影響という文脈において触れたもので、いずれも、「濠亜地中海」の内容そのものについて具体的に論じたものではない。

そこで本稿では、「濠亜地中海」の生まれた経緯・背景と内容、及び現在の安全保障環境に含蓄する意味について考察する。ちなみに、地域名称としての「濠亜」という語は、20 世紀初頭から日本では既に見られていた²。

1 欧米の地政学における「濠亜地中海」

「濠亜地中海」という地域概念を最初に提唱したのは、ドイツの地政学である。ヘルマン・ラウテンザッハ (Hermann Lautensach) は、1924 年『地政学雑誌』(Zeitschrift Für Geopolitik) に

論文「地政学的勢力角逐地としての地中海」(Die Mittelmeere als Geopolitische Kraftfelder) を書き、「ヨーロッパ地中海」、「メキシコ湾とカリブ海を伴ったアメリカ地中海」、「濠亜地中海」の 3 つの地中海の重要性に言及している。3 つの地中海は、北極から南に伸びる 3 つの「帯域」(ヨーロッパ-アフリカ、アジア-オーストラリア、北アメリカ-南アメリカ)の一貫性を切り離す空白地帯であると同時に、東西には世界の大洋(太平洋、大西洋とインド洋)を横に連結していることから、交通上の要衝であるだけでなく、多くの国家の勢力が衝突する地域となっているのである³。

さらに、有名なカール・ハウスホーファー (Karl Haushofer) は、同年『太平洋の地政学』(Geopolitik des Pazifischen Ozeans) を刊行した⁴。ハウスホーファーは、以下のように述べている⁵。

「若しわれわれが、西太平洋に於て、主要摩擦空間を求むるならば、われわれは、北アジアと東アジアとの間に介在する満州の天然の地理学的断層原野と、豊沃なる、しかも国防政策的に支え難きインズリンデ (蘭領印度) を繞るイギリスの国防技術的包囲が、一層鋭く凝視して初めて、その中にわれわれの眼に映じて来る、オーストラレーシア地中海に撞着する」

西太平洋における摩擦空間として、北東アジアの満州と「濠亜地中海」の重要性を指摘したのであるが、一方彼自身同書において、「濠亜地中海」をめぐる地政学に関して、これまで十分説得力の

ある説明はなされていないと述べていた⁶。

1930年代に入り、1936年、クルト・ヴィールビツキー（Kurt Wiersbitzky）は、『濠亜地中海の政治地理学』（Politische Geographie des Australasiatischen Mittelmeeres）⁷を刊行した。

「濠亜地中海」を初めて書名に入れた研究書である。ヴィールビツキーは、「濠亜地中海」の対象地域を、アジア大陸の東南部、すなわち南シナ海からマラッカ海峡、マラヤ諸島に及ぶ地域、具体的には、シャム、仏印、英領マラヤ、蘭印、フィリピン、英領ボルネオ、ポルトガル領チモールと定義している。しかし、豊富な図表など添付資料を含み網羅的に記述がなされてはいるものの、「濠亜地中海」の有する地政学的意義について、論理的な説明は十分なされていない⁸。

また、1938年、ゲルハルト・テベナール（Gerhard von Tevenar）は、論文「防衛上の問題－蘭領印度」（Verteidigungsprobleme: Niederländisch-Indiens）において、日本と英国の勢力伸張が衝突する地域として、蘭印を中心とする「濠亜地中海」に言及している⁹。同年、ワルター・パール（Walther Pahl）は、『地球の政治的容貌－世界政治地図』（Das politische Antlitz der Erde: ein weltpolitischer Atlas）¹⁰を刊行、「濠亜地中海」に当たる地域を、香港－シンガポール－オーストラリアのダーウィンを結ぶ「イギリスの戦略的三角形」と称し、「シンガポールの地位は、香港、ダーウィン港の要塞化によって、鉄壁の三角形を形成し、柵を張りめぐらしたやうに、南支那海への通路を閉鎖している」と指摘している¹¹。

ドイツ以外では、オランダ出身の地政学者のニコラス・スパイクマン（Nicholas John Spykman）を挙げるができる。第二次世界大戦勃発以降であるが、1942年に『世界政治における米国の戦略－米国とバランス・オブ・パワー』（America's Strategy in World Politics: the United States and the Balance of Power）¹²を発表した。

スパイクマンは、アジアとオーストラリア及び太平洋とインド洋の間に位置する地域を「アジア地中海」（the Asiatic Mediterranean）と称し、「この内海は、台湾、シンガポール、オーストラリア北端のケープヨーク半島に位置するトレス海峡を結ぶ三角形を形成している」と定義している。さらにこの地域は、軍事・交通上だけではなく、豊富な鉱物資源と肥沃な土壤に恵まれていると指摘、したがって、日本海軍による同地域の支配が実現すると、「オーストラリア、ニュージーランドでは、白人社会が崩壊してアジアからの移住者を受け入れ、新たな東洋世界に同化した人種構成になることが予想される」と警告していたのである¹³。

さらに1944年には、スパイクマンは、『平和の地理学』（The Geography of the Peace）¹⁴を刊行した。同書では、「旧世界の南東側と南西側の沿岸には、オーストラリアとアフリカ大陸まで広がる二つの地中海がある。この二つの沖合の大陸のポジションは、主に『ヨーロッパの地中海』と『アジアの地中海』を支配する国によって決定される」と指摘していた¹⁵。

このように、欧米の学界では、「濠亜地中海」を含む世界における3つの地中海の交通・戦略上の重要性が指摘されたものの、特に「濠亜地中海」について論理的な説明が十分なされなかった。この点を、より具体的に意味づけして深めたのが、1930年代の日本の地理学者や海軍軍人であった。

2 日本における「濠亜地中海」をめぐる議論

日本において、「濠亜地中海」を初めて紹介したのは、地理学者の岩田孝三である。岩田は、1938年7・8月、『地理学』誌上に論文「濠亜地中海領域に於ける政治地理的問題（一）、（二）」を発表した。同論文は、ドイツを中心とする欧米における「濠亜地中海」に関する研究史を概観したうえで、ハウスホーファーの指摘する「ヨーロッパ地中海」、「アメリカ地中海」、そして「濠亜地中海」

という 3 つの地中海の共通点と相違点を分析している。いずれも軍事戦略及び交通上の要衝である点は共通しているが、一方相違点、特に「濠亜地中海」の特殊性について、交通政策上、印度洋と太平洋間の「貫行地域」、一方東南アジアとオーストラリア間の「橋梁」をなしていることと、「経済政策的に、この地中海を繞る島嶼群の広大なること、及び極めて豊饒なる生産資源を有し、経済的価値多い領域をなすが為に他の二つの地中海領域を遙かに凌駕して居る」と指摘していた¹⁶。

岩田ののち、「濠亜地中海」を日本に広めたのは、中村良三海軍大将(予備役)である。中村は、1878(明治 11)年青森県に生まれ、1899 年海軍兵学校卒業(27 期)、第二艦隊司令長官、佐世保・呉鎮守府司令長官、艦政本部長、軍事参事官などの要職を歴任して、1936(昭和 11)年 3 月予備役となった¹⁷。

中村は、1939 年 4 月『太平洋』に、論文「濠亜地中海論」を発表した。彼は、「濠亜地中海」について、「海域としては南支那海よりセレベス海、バンダ海、アラフラ海を含み、瀕海の領土としては英、仏、蘭、米の植民地及南支那がある」と定義している。そして、「濠亜地中海」の重要性について、他の二つの地中海同様に、「両大洋を結ぶ戦略的好位置と其の内に包含せらるる経済的好条件とに恵まれ、此に依るものは左右両洋に雄威を振ふに至るは歴史の示す所である」と指摘している。にもかかわらず、英国はシンガポールの大軍港を拠点として、フランス、オランダを従え、オーストラリアやニュージーランドと呼応して、「將に英国の領海」として、「濠亜地中海」を以て日本の封鎖を企図しており、日本は注視する必要があると警鐘を鳴らしたのである¹⁸。

1941 年 1 月には、同じ『太平洋』に論文「大日本か小日本か」を発表した。中村は、「濠亜地中海」の価値について、より具体的に以下のように述べている。第一に、左右に両洋を擁しているため、交通の要衝であり、通商貿易の大動脈に当たり、「之を制扼するものは、克く他の死命を制

することが出来る」こと。第二に、両側に大陸を擁していることから、迂回することが困難なため、側面よりの攻撃を顧慮する必要がなく、防衛に適していること。第三に、地域が広大なため、地域内の物資によって持久が可能であり、攻撃側の封鎖は困難であり、もし行った場合、個々に分撃されること。第四に、防御側は、地域内を陣地など軍事目的のために自由に利用でき、それは機動部隊の行動と相俟って、敵の強大な海軍にも対抗し得ること。

さらに、前の論文「濠亜地中海論」が、敵国として英国を想定していたのに対して、第二次世界大戦の勃発と日米関係の悪化を受けて、「米は今や濠亜地中海に君臨せんとしてゐる、英、蘭を左右にして其の防衛を強化し・・・今や南方国防国境は米の席捲するところたらんとし、早晚彼の攻撃拠点として難攻不落を誇る鉄壁たるに至るであらう」と、英国に代わり米国を敵国と想定していたのである。

そして、結論として、「小日本」に甘んじるのではなく、「大日本」を建設することによってのみ、「国難は之に拠りて突破せられ、危局或は救はれん乎」と結んだのであった¹⁹。

対米開戦直前の 1941 年 11 月には、『読売新聞』紙上に、「濠亜地中海」と題して 4 回にわたり連載を行った。連載では、『濠亜地中海論』で世界に喧伝された濠亜地中海の名付け親」と紹介された中村は、「濠亜地中海は日本の関ヶ原であり天王山である」と論じ、「濠亜地中海にジックリ腰を据えることが出来れば大東亜共栄圏は出来るが、ここが敵性国の手に帰すれば日本の国防が怪しくなる」と指摘していた²⁰。

開戦直後の 1942 年 1 月には、中村の論稿も収録した読売新聞社社会部編『日章旗翻へる亜濠地中海』(豊国社)が、出版された。同書には、中村のほか、鶴見祐輔(衆議院議員)、平貞蔵(評論家)などの著名人も寄稿していた。

さらに同年 1 月に行われた「濠亜地中海の戦略的価値」と題した講演において、「濠亜地中海」

は、東から米国、西から英国、北からは日本の勢力が拡張し、日・英・米の勢力が交錯しているため「三国間の争覇の天王山」であり、現在は英米が結託したため、日本対英米の形勢となっていると指摘、「此の濠亜地中海の地域を握りさへすれば戦争の峠は越して居ります」と結んでいた²¹。

一方、濱田吉次郎は、南洋群島の「不沈の浮城」としての戦略的価値を論じた論文「南方基地としての南洋群島論」において、英米が共同して日本に対抗する際、その戦略的形狀は、海軍根拠地の香港、シンガポール、ダーウィン、マニラを結ぶ「濠亜戦略四辺形」であり、それはまさに「濠亜地中海」であると指摘する。そして、「濠亜地中海」の特徴として、第一に最も広大で抱擁する島嶼の総面積が極めて大きい、第二に通路が無数（ほかの二つの地中海は運河があるため、それ掌握すれば足りるが、それが不可能）であり、そのため「濠亜地中海」を支配するためには、「強力なる海軍優秀なる戦術の持主」でなければならぬと結論付けていた²²。

また、高橋三吉は、歴史の中心舞台は太平洋に移りつつあるとの認識から、英国にとって大腿骨であるインドとオーストラリアをつなぐ紐帯となっているのが、蘭印を中心とする「濠亜地中海」で、それを切断されれば英国の領土は各々孤立に陥ってしまうと、太平洋時代における「濠亜地中海」の重要性を強調した²³。

このように、日本における「濠亜地中海」をめぐる議論で特徴的なのは、交通上及び軍事戦略上の要衝であることに加え、ほかの二つの地中海と異なり、蘭印やニューギニアなど資源が豊富な点を指摘しており、特に無資源の日本にとり、これは死活的に重要な問題であったのである²⁴。

3 濠亜の一体性

「濠亜地中海」の重要性の主張から拡張して、「濠亜地中海」の統一性、さらには日本をはじめとするアジアとオセアニアとの一体性を主張する議論が、地理学者を中心になされていった。

例えば、江澤讓爾は、「濠亜地中海」地域は、地形上から見ると一見分裂しているようであるが、それは、欧米勢力の進出・植民地化と相互の対立によってもたらされた「偶然性」によるもので、むしろ、本質的には地史学、気候、経済形態、人種の側面から検証すれば、統一性を有しており、それは『地理的論理』又は『地政学的必然』であると主張した²⁵。

さらに、飯本信之は、「濠亜地中海」は、インド洋と太平洋、及びアジア大陸とオーストラリア大陸と間の二重の通過的位置にあり、これまで後者はほとんど作用してこなかったが、今後日本は同地域に膨張すべきであると説く。その理由として、気候、地質、地貌、人種などの面における考察を踏まえて、以下のように指摘した²⁶。

「濠亜地中海及び其の陸環は、日本と同一の統一的気節風帯内に位置し、地質的には日本列島と連関するものであり、その地貌も亦日本列島に極めて類似を有ち、人種的に一脈の相通ずるところがあり、斯くして自ら自然地理的な統一的共同体を形成し、且つ又地理的政治位置よりも我が国とは不可分の関係にあり」

大東亜戦争開戦以降になると、さらに国策色を強め、煽情的になっていった。小牧實繁は、ヨーロッパ人が、オーストラリアとニューージーランドを総括して「オーストララジア」(Australasia)と称したように、同地域はアジアに外ならず、「南アジア大陸」であるとの前提から、「濠洲もさうだ。大東亜海(濠亜地中海)域の延長として濠洲が必然的に東亜に、日本に結合せらるべきは言ふまでもないのだ」と指摘した²⁷。

さらに、「歪められた濠洲、ニューージーランドを再びアジアに戻すことは、大東亜を建設し世界に新秩序を齎す為に必要欠くべからざる課題であるといはなければならない」とまで主張したのであった²⁸。

一方、川西正鑑は、「広域経済圏」、地域的に言えば「南北縦断ブロック」、具体的には、「ユーラフリカ圏(ヨーロッパ・アフリカ)」、「(南北)ア

メリカ圏」などが形成されつつあると指摘する。それは、北半球は人口が集中し工業化されているのに対して、南半球は人口稀薄で資源地帯である以上、南北の分業は必然的であり、したがって、同様に、オーストラリアは、人口や資源の観点から「東亜共栄圏」に含まれるべき地政学的必然性があると指摘した²⁹。

同様に、太平洋協会の井口一郎（弘報部次長）も、南太平洋に生まれる新しい空間編制において、オーストラリアは国際連盟やワシントン条約という枠組みではなく東アジアの市場と統合することにより、「すなわち、ロンドン－カンベラーウオシントンといふ東西の水平的結びつきよりも、南北垂直的方向、すなわち東京－カンベラといふ軸線を構成することこそ、正に地政学的視角である」と指摘していた³⁰。

まさに、「一九三〇年代のブロック経済から広域経済圏への歴史的運動の必然性を前提としつつ」、大東亜戦争開戦後の南方圏の拡大を受けて、オーストラリアもその対象として設定されていたのであった³¹。

他方、このような日本とオーストラリアを一体化する見方は、日本では明治期から見られた。有名なキリスト教宗家の内村鑑三は、スイスの地理学者アーノルド・ギョー（Arnold H. Guyot）の著作などを参考にしつつ、1894年に『地理学考』（のち、1897年改訂版で『地人論』と改題）を刊行した。内村は、アフリカ、南米、オーストラリアの「南三大陸」は、各々ヨーロッパ、北米、アジアの「北三大陸」に付属しており、「ヨーロッパはアフリカを同化し、北米は南米に伸び、アジアは其理想をオーストラリアに施こし以て益々其特質を發揚し得べし」と述べていたが³²、同書は、戦時期において、国際政治学者の神川彦松の「世界三大広域論」などにも影響を及ぼしていたのである³³。

おわりにー「西太平洋同経度国家連合」？ー

現在に眼を転じると、「濠亜地中海」の中心である南シナ海は、中国と東南アジア諸国及び米国が、覇権をめぐる対立している。東南アジアが英米仏蘭等から独立、日本が中国に入れ替わっただけで、その構図は1930年代と変わっていない。戦前・戦後の日本、及び現在の中国にとって、同地域は単に戦略・交通上重要であるだけでなく、資源の面においても大きな意味を有している。従って、現在の中国の動向を検討する際、大東亜戦争前後の「濠亜地中海」をめぐる日本の地政学的な考えは、多くの示唆を提供し得るであろう。

さらに、「濠亜地中海」は、アジア大陸とオーストラリア、及び太平洋とインド洋の間に位置するが故に、地政学的に重要な意義を認められたのであるが、安倍晋三総理が提唱する「インド太平洋（「自由で開かれたインド太平洋」）」構想にとっても、まさの両洋を結合させる地域としての役割を担っているのである。一方、中国にとっても、「一帯一路」の一つの柱である「21世紀海上シルクロード」において重要な海域である。

マイケル・オースリン（Michael Auslin）は、南シナ海における中国の動きに対するアメリカの対応を論じた論文において、以下のように述べている³⁴。

「アジア・太平洋地域の全体の地理戦略的な構図を理解するためには、1940年代にごくわずかに議論された概念を発掘する必要がある。それは、東アジアの『内海』もしくは『アジア地中海』と称された統合的な戦略的空間である。この概念の有用性は、米国及びその同盟国やパートナーが直面する地政学的挑戦が東アジアにおける共有の海洋空間全体の掌握をめぐる高まりつつある係争であることをより明確にすることである」

また、大東亜戦争開戦後における、「濠亜地中海」を介したオーストラリアを中心とするオセアニアとアジアの一体化の構想は、確かに時流に迎合した当時の日本の地政学といった問題を色濃く内在しているとはいえ、東西だけではなく南北

を軸として提携すべきとの地政学的な見方は、1924 年に初めて「濠亜地中海」を提唱したラウテンザッハの大陸の南北を貫く 3 つの「帯域」（ヨーロッパ・アフリカ、アジア・オーストラリア、北アメリカ・南アメリカ）の概念から既に見られたものであった。

戦後の日本においても、例えば、生態史観で有名な梅棹忠夫は、南北アメリカ及びヨーロッパとアフリカは各々同経度上に南北に並んでいるため強い関係で結ばれており、日本も、日本・インドネシア・ミクロネシア連邦・フィリピン・バプア・ニューギニア・オーストラリア・ニュージーランドといった第三の同経度連合、すなわち「西太平洋同経度国家連合」を形成すべきであると説いている。この連合は、経済的に相互補完的な協調と連帯の関係を持つ「安定供給・安定需要の経済圏」を形成することができ、「二一世紀以後の日本の未来図だ」とまで述べている。一方、横、すなわち西のアジア大陸に向かうべきではなく、それは古代からの日本の失敗の歴史に照らせば明らかであるというのである³⁵。

また、生態史観とは別の外交史の分野でも、日本政治外交史の権威である北岡伸一は、オセアニ

アには具体的に言及はしていないが、太平洋島嶼国、ASEAN 諸国、台湾との「西太平洋連邦」を提唱している³⁶。

梅棹・北岡両氏の構想からは、いずれも中国や韓国など東アジアが除外されている。特に、梅棹は、日本はアジアではない、日本がアジアの一部とは虚像であるとの前提から、「日本は大陸に深くかかわって、ロクなことはない」と厳しい³⁷。

興味深いことに、この点は、戦前の大東亜共栄圏、そして近年の「東アジア共同体」とは、大きく異なっている。大東亜共栄圏と「東アジア共同体」は、趣旨や背景は全く異なるものの、いずれも東アジアを所与の前提としているのである。日本はアジアか欧米か、大陸国家か海洋国家かという、日本外交にとって古くて新しいテーマを、改めて問いかけている。

21 世紀の日本の対外戦略を考えるに際して、1930 年代に日本で行われた「濠亜地中海」をめぐる議論は、もちろん時代的制約はあるものの、多くのことを我々に語りかけているのではないだろうか。

1 波多野澄雄「『東亜新秩序』と地政学」三輪公忠編『日本の一九三〇年代—国の内と外から—』（彩光社、1880 年）、後藤乾一「『濠亜地中海』の国際関係」同『近代日本と東南アジア』（岩波書店、1995 年）、Henry P. Frei, *Japan's Southward Advance and Australia: From the Sixteenth Century to World War II* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1991)。

2 例えば、西川藤吉「濠亜旅行談」『動物学雑誌』（第 166 号、1902 年 8 月）、井上雅二「濠亜の両系統」同『時事叢書 第 19 編 南洋』（富山房、1915 年）など。

3 Hermann Lautensach, "Die Mittelmeere als Geopolitische Kraftfelder," *Zeitschrift Für Geopolitik* (I. Jahrgang 1924, I. Halbband, Heft 1-6/Januar-Juni), p.36.

4 Karl Haushofer, *Geopolitik des Pazifischen Ozeans* (Berlin: K. Vowinkel Verlag, 1924). 以下の引用は、翻訳版であるハウスホーファー、太平洋協会編訳『太平洋地政学』（岩波書店、1942 年）に依る。

5 ハウスホーファー『太平洋地政学』479-480 頁。

6 同上、274 頁。

7 Kurt Wiersbitzky, *Politische Geographie des Australasiatischen Mittelmeeres* (Gotha: Justus Perthes, 1936). 関連する邦訳書として、クルト・ヴィールビツキー、井汲越次訳『東南アジア地政学（原題：Südostasien. Ein Kampffeld der Zukunft zwischen Weiß, Rot und Gelb）』（科学主義工業社、1941）年がある。

8 岩田孝三「濠亜地中海領域に於ける政治地理的問題（一）」『地理学』第 6 巻第 8 号（1938 年 7 月）13 頁。

9 Gerhard von Tevenar, "Verteidigungsprobleme: Niederländisch-Indiens," *Zeitschrift Für Geopolitik* (X V. Jahrgang 1938, 4. Heft/April), p.270.

10 Walther Pahl, *Das politische Antlitz der Erde: ein weltpolitischer Atlas* (Wilhelm Goldmann, 1938). ワルター・パール、千葉秀雄訳『世界政治地図』（清和書店、1939 年）として翻訳・刊行さ

れた。

- 11 パール『世界政治地図』183頁。
- 12 Nicholas John Spykman, *America's Strategy in World Politics: the United States and the Balance of Power* (NY: Harcourt, Brace and Company, 1942). 翻訳は、ニコラス・J・スパイクマン、渡邊公太訳『スパイクマンの地政学—「世界政治と米国の戦略」—』(芙蓉書房、2017年)。
- 13 スパイクマン『スパイクマンの地政学』80—81、105—106頁。
- 14 Helen R. Nicholl (ed.), *The Geography of the Peace* (NY: Harcourt, Brace and Company, 1944). 翻訳は、ニコラス・J・スパイクマン、奥山真司訳『平和の地政学—アメリカ世界戦略の原点—』(芙蓉書房、2008年)。
- 15 スパイクマン『平和の地政学』98—99頁。
- 16 岩田「濠亜地中海領域に於ける政治地理的問題(一)」14頁。岩田は、のちに「第四章 東南亜細亜(環亜濠地中海領域)」岩田孝三『朝日新聞講座 38 地政学』(朝日新聞社、1942年)を執筆している。
- 17 伝記に、外崎克久『津軽の涛声—海軍大将中村良三とその時代』(清水弘文堂、1988年)がある。
- 18 中村良三「濠亜地中海論」『太平洋』第2巻第4号(1939年4月)19、26頁。同論文は、企画院第一部から、対南方策研究の参考のため、「企南100号ノ7 濠亜地中海論(参考)」(昭和14年4月26日)として配布された。
- 19 中村良三「大日本か小日本か」『太平洋』第4巻第1号(1941年1月)5、22—23頁。
- 20 中村良三「濠亜地中海 ①」『読売新聞』1941年11月14日。
- 21 中村良三「濠亜地中海の戦略的価値」『経済倶楽部講演 昭和17年第7輯』(東洋経済新報社出版部、1942年3月)3、5、26頁。
- 22 濱田吉次郎「南方基地としての南洋群島論」『太平洋』第4巻第5号(1941年5月)8—9頁。
- 23 高橋三吉『南方共栄圏を語る』(大日本雄弁会講談社、1941年)31—36頁。
- 24 「濠亜地中海」を論じた主な論稿として、ほかに以下のものがある。斎藤忠「濠亜地中海と英国」『新亜細亜』(1939年10月号)、匝瑳胤次「濠亜地中海の争覇戦」『文藝春秋』(1941年4月号)、吉村正「濠亜地中海論」『反共情報』第4巻第9号(1941年9月)、岩田岩二「濠亜地中海の戦略的地位」同『アメリカの反撃と戦略』(三協社、1942年)、「第一章 亜濠地中海(大東亜海)の政治地理的意義」立命館大学文学部地理学教室編『南方地理研究』(立命館出版部、1942年)、江

澤讓爾「濠亜地中海に於ける仏領印度支那の位置価値の変化」『地政学』第3巻第2号(1944年2月)など。

- 25 江澤讓爾「濠太利亜細亜海の地政学的考察」『国際経済研究』第2巻第4号(1941年4月)71—79頁。同様な主張として、吉村正「南方政策の地政治学的根拠」『改造』(1941年8月臨時増刊号)など。
- 26 飯本信之「南洋の地政学」飯本信之・佐藤弘編『南洋地理体系 第一巻 南洋総論』(ダイヤモンド社、1942年)122—123頁。
- 27 小牧實繁『日本地政学』(大日本雄弁会講談社、1942年)129、159—163、201、205頁。
- 28 小牧實繁『世界新秩序建設と地政学』(日本出版配給、1944年)141頁。同様な主張として、和田俊二「大洋州の地政学的考察—その抹消より南アジアへ—」小牧實繁編『大東亜地政学新論』(星野書店、1943年)。
- 29 川西正鑑『東亜地政学の構想』(実業之日本社、1942年)395—404頁。
- 30 井口一郎「濠洲への地政学的視角」『図書』第70号(1941年1月)30頁。
- 31 波多野「『東亜新秩序』と地政学」33頁。
- 32 内村鑑三『地理学考』(警醒社、1894年)245—246、263—265頁[[内村鑑三全集 2](岩波書店、1980年)352—480頁、所収]。
- 33 神川彦松「大陸連合体建設の基礎条件」『国際法外交雑誌』第41巻第12号(1942年12月)[[神川彦松全集 第10巻](勁草書房、1972年)933—958頁、所収]。
- 34 Michael Auslin, “Asia’s Mediterranean: Strategy, Geopolitics, and Risk in the Seas of the Indo-Pacific (Commentary),” *War on the Rocks* (February 29, 2016).
- 35 梅棹忠夫「アジア体験の五〇年」、「わたしにとってのアジア」同『梅棹忠夫著作集 第6巻 アジアを見る目』(中央公論社、1989年)15—16、23—26頁。梅棹忠夫「人類史からみた現代社会」同『梅棹忠夫著作集 第13巻 地球時代を生きる』(中央公論社、1991年)307—308頁。梅棹忠夫編『文明の生態史観』(中央公論新社、2001年)54—56、218—221頁。
- 36 北岡伸一「西太平洋連邦を目指して」『アステイオン』第91号(2019年12月)148—149頁。ちなみに、評論家の山崎正和は、アジアは曖昧な言葉であり、日本は「脱亜入洋(「洋」は太平洋の意)」すべきであると主張している(山崎正和ほか『脱亜入洋のすすめ—山崎正和对談集』(TBS・ブリタニカ、1995年)67頁)。
- 37 梅棹『文明の生態史観』220頁。

プロフィール

profile

研究幹事

庄司 潤一郎

専門分野：近代日本軍事・政治外交史、
歴史認識問題

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。

NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29171）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>